

校内研修報告書	
研修者	西村 昇
分掌・教科名	教務部・理科
研修期間	平成26年9月13日(土)～9月14日(日)
研修場所	東京都千代田区(ホテルグランドパレス)
研修テーマ	東京大学の今春入試結果から見た志望動向、教科分析と対策について
主な研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 東大入試結果分析、動向レポート 教科別分析会：再現答案・成績情報から見た、東大入試の状況と今後の対策について

○研修報告

◆東京大学入試結果分析・動向レポート(河合塾)

①志願者の推移

- センター試験の平均点によって増減がある(平均点が高いと増、低いと減)が、おおむね一万人前後で推移している。
- 京都大学はじりじりではあるが、志願者を増加させている。
- 文低理高の傾向が続いている。東大とは関係ないが一橋大は減少傾向、東工大は増加傾向。

②センター試験の状況

- 文科類、理科類それぞれ得点率90%以上でほぼ合格するといつてよい。

【文科類】

- 得点率80%が合格者の下限値
- 合格者得点率平均は、文Ⅰ、文Ⅱ、文Ⅲそれぞれ90%、88%、87%
- 数学・理科で得点できれば大きく合格に近づく。
- 現役生は、社会科科目の二科目の出来(完成度)次第というところがある。

【理科類】(理Ⅲ除く)

- 得点率80%が合格者の下限値
- 合格者得点率平均は、理Ⅰ、理Ⅱ、理Ⅲそれぞれ90%、89%、92%
- 数学、理科は満点が必要。

③2次試験の状況

【文科類】 国120、外120、数80、地歴120 合計440で算出

- 合格者平均得点率は文Ⅰ、文Ⅱ、文Ⅲそれぞれ60%、58%、57%であった。よって、平均で6割程度の得点率が、合格の目安となろう。合格者最低ラインは230点(52%)。
- 二次試験の成績分布をみると、外国語・地歴が得点源であり、取りこぼすと合格が遠のく。
- 国語は難易度が高いので差がつきにくい、ここ二年では差がつきやすくなっている。
- 数学が年によって平均点が大きく変わり、差がつきやすい。

【理科類】 数120、外120、国80、理2 120 合計440で算出

- 合格者平均得点率は理Ⅰ、理Ⅱ、理Ⅲそれぞれ55%、54%、69%であった。よって、平均で5割程度の得点率が合格の目安となろう(理Ⅲ除く)。合格者最低ラインは200点(45%)。
- 二次試験の成績分布をみると、外国語・理科2が得点源であり、取りこぼすと合格が遠のく。6割以下の得点率では、合格は無理である。
- 数学は難易度が高いので平均点が低くなっており、数学での高得点は合格への近道となる。数学で60点以上得点した者は全員合格している。
- 国語は難易度が高く、差がつきにくい。
- 外、理で失点すると、挽回は難しい。理科は特に、二科目目の完成度がカギである。

【後期試験について】

- 推薦入試が始まるので、来年で最後。
- センター試験得点率は9割が必要。
- 二次試験の総合問題は、5割程度で合格。

④第1回東大即応オープンの結果から

- 文科類については、既卒生の受験者が減少したことから、競争は緩和

・理科類については、Ⅱ類の受験者が大きく減少。ただし、この結果を見て、今後増加するかも。

⑤その他 東大入試課長の講演より 入試関連について抜粋

- ・東大の教育理念は「行動シナリオ FOREST2015」にて明確にした。
- ・東大の入学試験（前期）については、「特殊な高校でないと対処できないような要求はしない＝指導要領の範囲内」。後期については「学問を俯瞰的にみる力＝総合力をみる」
- ・高校段階までの学習で身につけてほしいことは、総合案内 6～7 ページに書かれているとおりである。入試問題はこれらに基づいて作成される。
- ・推薦入試については、前期日程試験ではかれない特徴を持つ生徒を取りたいとの意向から後期試験に代わり導入
- ・入学後は特徴を生かせる専門課程に選抜なしで進むことができる。
- ・センター試験はおおむね 8 割（医学部医学科は 8 割 7 分）以上を目安。
- ・高校時の特徴的な活動については、エビデンス（証明書類）を提出してもらい評価。
- ・学内や高校教員から基準や書類のフォーマットを明確にしてほしい等々の要望があることは把握しており、情報交換を進めている。
- ・推薦入試に関する詳細情報は、可能なものから随時公表していくので確認してほしい。

◆教科別分析会

- ・東大の二次試験は記述・論述式であり、まずは「見てもらえる答案」を作成することが大切。
- ・問題数が多く、一問 1 点もしくは 2 点程度の配点であるので、芯を外さない論述力を身につける必要がある。
- ・題意をきちんと汲み取り、それに沿った記述でなければ、中身は正しくても得点できない
- ・理論、無機、有機の三分野から出題される。理論が一番大切。理論分野は時間がかかるので、典型的な事項については式を暗記させることも必要。無機は苦手とする受験生が多いが、とにかく基本事項は覚えなくては仕方がない。有機は構造決定の訓練をしておくことが大切。

【2014 年度入試分析】

- ・全体 今年度は、得点開示による得点よりも再現答案による得点のほうが大幅に下回った。今年度については、論述問題について採点基準の緩和があったのではないか。
- ・理論 エの論述は、有効核電荷と距離に触れていないものは、内容が正しくてもダメであろう。オの計算問題の得点率が悪かった。時間切れで回避したのであろう。
- ・無機 ウ、キの得点率が悪く、キは白紙が多かった。計算問題であり、時間がかかるので後回しにしたのであろうか。また、シ、ス、セも得点率が低かった。
- ・有機 例年、化学Ⅰの範囲からの出題であるが、今年度はⅡの選択領域からの出題があり、十分な対策をとれないまま受験した生徒が多かったのではないだろうか。特に、ス、セ、ソは得点率が低く、これは時間不足というよりは取組不足の結果であろうと考える。（有機→無機→理論の順番で取り組む受験生が多いため）

◆今後の本校での指導改善に向けて

【化学の指導】

- ・問題文を読み解く力の育成 … 長いリード分を素早く読み、意味を把握する力が必要となる。化学的バックグラウンドにもとづいた読解力および既習事項との関連性を見つけ出す類推力の育成が必要である。
→ 早い段階から東大の過去問に触れさせ、必要な能力を認知させたうえでそれを育成する時間をとる。
- ・記述力の育成 … 題意を理解し、それに沿った内容で記述する力を育てる。
→ 個別添削指導を行う

【学校・学年として】

- ・東大合格者を増やすには、そもそも論として東大志願者を増やさなければならない。これは個人的な見解であるが、東大を十分に狙える実力があながら、京都大学を志望する生徒がいるように思う。学校目標として成り立つかどうかは別にして、東大進学者を増やすことを目標とするのであれば、生徒の実力に合った適切な志望校を選択させる指導を、より一層強化していく必要があるように思う。